

古書店が私の図書館だった ——トルコ——

粕谷 元

かなり個人的な、しかも昔の話
をすることをお許しいただきたい。
私の専門はトルコ史で、とくに
そのなかでも「トルコ革命史」と
呼ばれる分野である。

一九二三年に共和制に移行した
トルコでは、西洋植民地主義とオ
スマン専制に対する国民の闘争の
果てに共和国が樹立されたために
その前後の過程は後に「トルコ革
命」と称され、「トルコ革命史」に関
する研究が新体制の正統性と結び
ついて自国史研究のなかの一大ジ
ヤンルを形成することとなった。

歴史学の研究は、いうまでもな
く、史料や研究文献などを利用し
て行うものである。ところが、私
がトルコ史研究を志して修士論文
を執筆していた一九九〇年代初頭
は、トルコ国内には無数に存在す
るトルコ革命史関係のトルコ語書
籍が日本国内の諸図書館に充分に

所蔵されていなかった。読者諸氏
からは、それならばトルコに行っ
て自分で収集してくればよいとい
われるかもしれないが、OPAC
やインターネットによる図書検索
システムがトルコでまだほとんど
構築されていなかった当時、そも
そもトルコ革命史に関するトルコ
語書籍・雑誌がどれほど存在する
のか、その全体像をその頃の私は
よく把握できなかったのである。

結局なんとか修論を書き上げた
が、それはトルコ語の先行研究の
利用の点で大きな課題が残るもの
となった。私は早々にトルコに留
学して、トルコ革命史に関するト
ルコ語書籍・雑誌の全体像をじか
に知りたいと強く望むようになり、
かくして一九九三年一月、トル
コに留学した。

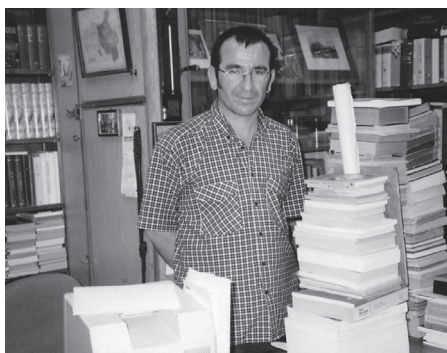
私の留学先はアンカラ大学政治
学部だった。ところがアンカラで

の住居を現地で一から探さなけれ
ばならなかったため、イスタンブ
ルですでに留学生生活を送っていた
高松洋一氏（現東京外国語大学准
教授）の家にしばらくの間厄介に
なることになった。ヨーロッパ側
のベシクタシ地区にあった高松氏
のマンションで迎えたトルコ生活

初日の夜、「明日は粕谷君の行き
たいところに付き合うが、まずは
どこに行きたいか？」と高松氏に
聞かれた私は、迷うことなく「古
本屋」と答え、高松氏はその申し
出を快諾してくれた。同氏こそ、
二年にわたる私の留学生生活を通じ
てイスタンブルの古書店・古書業
界事情、古書店での作法などを惜
しみなく教授してくれた、私の「ト
ルコ古書（店）学」の第一の師匠
というべき人で、私は今でも高松
氏にとっても感謝している。

翌日、我々二人はベシクタシ埠

頭から船に乗ってアジア側のカド
ウキヨイ埠頭に渡り、そこから入
り組んだ石畳の坂道を登って行っ
て、通り沿いにある一軒の古書店
に入った。これが私とデイル・タ
ーリヒ書店、さらにその店主サー
ミー・オナル氏との最初の出会
だった。店内に入り、書棚を眺め
るや否や、私は興奮を抑えること
ができなかった。存在は知ってい
たものの日本で結局目にするこ
とができなかった、あるいは存在さ
え知らなかった多数のトルコ革命
史関係の本が、書棚に所狭しと並
んでいたからである。実は、この
デイル・ターリヒ書店こそ、トル
コ革命史関係の古書の品揃えでは
トルコ有数の書店で、さらに店主
は、トルコの古書業界の重鎮の一
人であると同時にトルコ革命史関
係の著作を持つ著述家でもあった。
すでにこの店の常連だった高松氏
は無論それを熟知したうえで、私
を連れてきてくれたのである。そ
れ以来私は、アンカラに居住した
後もイスタンブルに出てきた際は
必ずこの店に立ち寄り、出された
チャイを飲みながらサーミー氏と
しばし歓談した後は、自分の身長
よりもはるかに高い左右の書棚を
すべて物色し、必要あれば、手に



サナト書店店主のアフメト・ユクセル氏
(2000年頃筆者撮影)

取った書籍について教えを請うたりしたのだった。

高松氏がその他に案内してくれたイスタンブールの古書店のひとつが、その名のとおりヨーロッパ側の旧ペラ地区(現ベイオール地区)にあったリブレリー・ド・ペラだった。一九九〇年代当時のトルコで屈指の品揃えを誇った古書店で、稀覯本を多数扱い、トルコで初めて古書の競売会を開いた書店としても知られる。一介の外国人留学生にとつては敷居の高い古書店だったはずだが、三沢伸生氏(現東洋大学教授)や高松氏などが共同経営店主たちと懇意にしていたおかげで、日本人研究者にはよくしてくれ、留学当初に私は立派に製本された同店のそれまでの在庫カタログと競売会カタログのほぼ全号をもらうことができた。このカタログがトルコ史関係の書籍・雑誌の書誌情報と内容を知るうえでどれほど役に立ったか計り知れない。

い。カタログには、書籍に関する簡にして要を得た説明が付されていたからである。アンカラ大学の図書館のカード目録などには、本の内容の説明などはもちろん記されていないなかった。リブレリー・ド・ペラの各カタログを合わせれば二万冊をゆうに超える本の情報がそこから得られたのであり、そのカタログ群は私の留学中の「愛読書」となった。

一方私の留学の本拠地であるアンカラには、当時前述の二書店と比べても遜色ない古書店が一軒だけあった。クズライ地区に小さな店舗を構えていたサナト書店である。私はたちまちこの店の常連となり、店主のアフメト・ユクセル氏と懇意になった。留学時代、さらにその後も、アフメトには探求書の探索などで随分と世話になった。東洋文庫が購入する本を私が選書した際、店舗とは別の場所にあった倉庫で選書作業を二日間かけて一緒に行ったこともある。倉庫というのは実は賃貸マンションのワンフロアなのだが、各部屋を壁から床まで埋め尽くした無数の本や雑誌を自由に手に取って選書した時間は、古本好きの私にとって何物にも代えがたい、至福の時

間だった。

さらにサナト書店は、私にとつて「単に本を購入する店」以上の存在でもあった。イスタンブールの有力古書店がそうであったように、サナト書店は、国内外の研究者や愛書家が集うサロンになっていたからである。留学時代の私にたとえばオランダの著名なトルコ近現代史研究者であるエリック・ヤン・ツルヒャー教授を紹介してくれたのはアフメトだった。ツルヒャー教授もまた、サナト書店の常連客だったのである。

このように、留学期間中古書店通いを続けた結果、留学期間を終えて帰国する頃には、どこの古書店でも目にしたことのないトルコ革命史関連の書籍は、トルコのどこの図書館においてもまずお目にかからないというような状況になってしまった。一九九〇年代半ば当時、各大学の図書購入が財政難から長年にわたって停滞していた、またアンカラの国民図書館(日本の国会図書館に相当)が長く休館していたという事情もあって、イスタンブールとアンカラの古書店全体が私のむしろメインの「図書館」だったのである。

あれから二〇年以上の時が経過

して、トルコの古書、古書業界を取り巻く状況は大きく様変わりした。前述のサーミー・オナル氏は二〇〇八年に他界し、デイル・タリーヒ書店は一代限りで閉店した。アフメトのサナト書店は、二度の市内移転を経て今もアンカラのカヴァクルデレ地区で健在だが、リブレリー・ド・ペラは共同経営者の離脱もあって、店の規模を大きく縮小させた。トルコにおいても古書販売はネット販売がすっかり主流となり、Nadikim.comという古書販売サイトには今やトルコ国内の古書店の大半が参加するようになって、同サイトで効率的に古書の探求、書誌情報の確認が可能になった(かくいう私もその利用者の一人である)。それとともに、特定の顧客にカタログを郵送して販売する方法や店舗販売のみの方法は、もはや廃れつつある。新たな本との出会いを求めて市内中の古書店を巡り、チャイを飲みながら店主や常連客との会話を楽しみ、そのようにして自分の専門分野については無論のこと、トルコ人やトルコ社会について学んだあの頃が、今となっては妙に懐かしい。(かすや げん/日本大学文理学部教授)